

2. 戸棚を開ける猫の話

昔、元垂水に清左エ門という人がいました。この人は博^{ばくろ}勞^うとって牛や馬の仲買をしたり、人々の牛馬の売買の世話をしたりして多くの里や村をまわっていました。

ある日、博勞の仕事で大崎の永吉という村に行き、(その頃は垂水領でした)かねて親しくしている人の所に泊まりました。

そこには十四、五歳位の下女がいましたが、家の主人がその女の子を呼び寄せて、この家の隅にある棚の中にけさ魚を買って入れて置いたが、どこにいったのか無くなってその跡もないが、お前は知っているだろうと言うと、下女は驚いた様子で、それは少しも知りませんと答えました。すると主人は恐ろしいような風で、あの棚の中には、朝晩に使う食器や、魚肉のような物も時には入れて置いたが、人の知らない中に無くなっていることが何度もあったが、お前は時々盗みとって食べたのだろう。近くには家も無いので、そのようなまがった事を誰が思いつくだろうか、今までは何も言わなかったが、そのようにかくすなら、叩いて痛い目にあわせてやるぞと、大変あらあらしい声で下女をののしると、その妻も主人と同じ心なのか、いろいろとおどかしました。

下女はしきりに目を押さえて涙を拭って、私も思いあたることがありましたら、そうだと申しあげますが、袖の涙の梅雨のように少しもこのような事は知りませんと、泣く泣く詫びているので、主人も確かに見定めた事ではないので、よしよし今日のところは許してやろう。しかしまた責めるおりもあるだろうと、いかめしそうに言いました。

清左エ門は、傍で聞いていて、主人と下女とどちらが正しいのか分からないので、心の痛む思いがして、急いでほかの事などを言ってまぎらかしましたが、主人は一寸用があるからと妻を連れてどこかへ出かけて行きました。

清左エ門は一人庭の方へ出て、何やかやとしていましたら、あの棚のあたりで扉をあけるような音がしました。丁度下女も家の外へ出て行ったと思ったので、誰であろうかと見てみると、この家に飼っている大きな肥えた猫が、人のいない間をうかがっているようすで、棚のもとに寄って、棚の戸を爪でひっかいていましたが、戸はやすやすとあいて、その中に入りました。しばらくは、何か物を食うような音が聞こえましたが、小さい魚を一匹口にくわえて出て来て、またもとのように戸をしめて、どこともなく猫は立ち去りました。

清左エ門は、思いがけないあやしい事に驚いて、さては、時々棚の中の物を盗み取っていたのは、この猫であったのか、主人はそうと思わないで、罪も無い下女をなじり問うとは、あまりにもひどすぎると独り言を言うのでありました。

その日の夕方、主人たちも帰ってきて夕餉の支度も終わって、やがて囲炉裏の周りを取りまいて何やかやと話している中に、清左エ門は、先に見た猫の有様をくわしく話し、棚の中の物が無くなったのは下女のしわざではないと申したら、主人も誰も、さては猫のしわざかと驚きあいました。

その時猫は炉の傍にうずくまり、眠っていましたが、清左エ門が、それその猫よと言った

のを聞いていたのか、猫は恐ろしそうな目付きで、しばらく彼に向かってにらんでいました。こうして夜も更けてきたので、そろそろ眠りに入ろうとしていました。

清左エ門は猫のようすが何となくあやしく感じましたので、自分の着ている着物を一枚脱いで枕をよせて、自分が寝床に入っているような形をつくって、自分は傍にある物の後にかくれて、小さい刀を抜いて手に持って、灯を小さくしてうす暗くして、息をひそめて様子をうかがっていました。主人もさてはと気がついて、杖を持って、同じように忍んでいました。

すでに夜明け近くになった頃、かの猫がそっと外から入って来て、寝床の内をのぞくように見えてましたが、清左エ門がこしらえて置いた寝すがたを、まことの彼と思ったのか、忽ち一飛びにとびかかり、その喉と思われるあたりにかみつきました。清左エ門はよく見とどけて、突然おどり出し、一刀で斬り伏せ、主人も続いて走って来て、共に猫を打ち殺しました。

猫は、これまで人に分からないようにして来た事を清左エ門に見破られ、主人に知らせたことを非常に口惜しく思って、その恨みをはらそうとの心であったのでしよう。

主人は大そう猫の心の非常な恐ろしさをにくみ、下女の罪の無いのをうたがったり、怒ったりした事を大変後悔しました。